文恭院實紀　十七

寛政六年甲寅
自七月
至十二月

内閣文庫
和書類
三六四號
五五冊
二三一函
一四架

内閣文庫
和書類
三六〇六四號
五五冊
一九函
一四架

史六〇

内閣文庫
番號 和 36064
冊數 55 (17)
函號 149 36

国立公文書館
National Archives of Japan

文恭院實紀　十七

寛政六年甲寅從七月至十二月

国立公文書館
National Archives of Japan

文恭院御實紀巻十七　寛政六年七月より十二月に終る

七月朔日月次拜賀例のごとし。青蓮院坊官北坊近江守廣香紀州の使。御暇給り金十枚拝賜あり。松平下総守君和。松平主殿頭忠馮。桑親。松平山城守信古。京極加賀守高有。阪城加番にさゝれ暇給ひ。綿物拝賜旧に同じ。小笠原信濃守長堯もしかり。三人領封の地に下さる。京極壱岐守高文子内膳高寛はじめてみえ奉る。随心院門跡某より

仕して於後麟祥院来入院おのゝ献り物して
謝しまつる大番頭遠藤備前守胤富坂城在番
の時給ふ物品旧親に同し与頭及番士も例のごと
くなり長崎奉行平賀式部少輔貞愛赴任のいと
まなふ賜物あり水戸少将治紀朝臣疱瘡な
やまれし後始て對面ありけるさりしにふまりのな
り給ひ黒木書院にして御對顔ありて饗
斗地を給はりけるに日光門主澄法親王へ御酌酒

井隠岐守忠美して檜重安楽心院宮に熱爪を
給はりまた又増上寺方丈智量へ使番石谷周
防守清豊して檜重を給はされて暑中を問
せらる尾張郎より家士して巣鷹鷂をさゝげ
らる
三日書院番与頭多門傳八郎信照子縫殿助信
雄もしも父死して家はたくもの六人寄合醫安
竹田法印公瑩香需散奉るゆへさらに命せらる

四日小普請加茂宮六郎右衛門重沈病置しまゝ
に伯父米花重称に家お続を仰付らる
五日清水郎用人本目権右衛門親平寄合本多
千八郎與皐牧野傳蔵成著小姓組荒尾平次
郎成章平八郎と改む書院番千本吉之丞原隆間宮雄
之助信興納戸松平九郎右衛門忠敷大番石野三
右衛門廣貴小普請水野庸之助君篤大番佐久
左衛門勝阜たまは小納戸となる留守居番松前八

左衛門嘉廣病免す
六日七夕の御祝として
御所々三家のかくしく及例の両しよう候して
鎮代秋さら参勤寄年行梅生主殿正久通同張
五を編ひ同し吟味役佐久間喜八茂之ハ金五枚
を編ふ我その所屋のともうら編相差ありされハ
関東川渠浚利年ハりしまよりてあり
七日七夕の佳節例よ同し

八日東叡山
浚明院殿霊廟に戸田采女正氏教代参す
十日
文昭院殿霊廟修理命せられしかは去りしより其の惣
督を戸田采女正氏教に仰付らる
十一日寄合大井信濃守持長子小納戸新右衛門
政表始免父致仕して子家継くもの十五人信
濃守持長ハ老の料三百苞をたまふ撫地方

石野氏三郎庚申富士見宝蔵番の跡をたまはり
内休息庵の右支配含地改め勤番持方並
手形をなる
十二日三縁山
惇信院殿霊廟に松平伊豆守信明代参す
十三日書院番頭蒲田能登守正技石川大隅守正
勤おこたりしかは公行りて残され寄合とある
能登守手形曲渕出羽守景露同付若年寄

監備ハ三縁山
文昭院殿霊廟修理の事命せられ勘定奉行
柳生主膳正久通同し格式の事仰付らる
十四日紅葉山
諸廟に詣られ東叡山
至心院殿霊牌所にて例平岡美濃守頼長代
参し三縁山
孝恭院殿霊廟にて側衆林肥後守忠英代参有

十五日盂蘭盆會により高家織田主計頭信由
御使して日光門主公澄法親王のもとへ時服二
十又同しく手まもて奏者番松平能登守乗保して
増上寺方丈智量へ銀五枚時服十領かハさる
日門ハ使僧増上寺方丈ハまうて来り謝し奉る
閑院宮二品太宰帥典仁親王去し十六日薨せら
れしかハ高家横瀬駿河守貞臣
若君の使として安楽心院宮を弔慰せらる親王ハ

兄宮なれ
ハなりし

十六日小姓組番頭高木筑後守正興浅野志摩
守長致共に書院番頭小普請組支配並大番
頭候寄合指揮をし 松平大炊頭君昭共に小姓組
番頭小納戸高井牟之助實徳小出又五郎守傳
水野虎之助忠篤ハ共に小姓となる

十七日紅葉山

御宮に太田備中守資愛代参れ

十八日小納戸和田仁三郎倫孝その職務をゆ
りて寄合となる この日吉原丹波守忠意病危
篤をもて使番荒木十左衛門政恒をもて問を
せたまふ 牛込誓閑寺三州信光明寺住職命ぜら
る この日末牌より

御所

臺の上淵姫君二丸へおうつりあり

二十二日持弓頭高尾孫兵衛信意新番頭となる

り使番堀三左衛門并従先手筒頭となる

二十三日浜の御庭にあそばされ清水御家老
山村信濃守良旺病免して寄合となる此の日大
番頭堀田豊前守正穀坂城成役の時頭に賜物八
恒例のごとし

二十四日大番頭白須甲斐守政雍は例となる

この日東叡山
孝恭院殿霊廟に井伊兵部少輔直朗代参す

二十五日西丸山里庭の茶支配和多田次郎兵衛
見習は休息庭の茶支配となり普請方下奉行
吹楽八五郎茂村西城庭の茶支配となる本多弾
正大弼忠寿は紋附の上下一具拝領す

二十七日酒井大学頭忠崇嫡（大学頭忠崇兄山城守忠埶子）
弥一郎忠実子義作忠恕に忠崇蔵米三千俵
分ちてその役料をさづかる請ひしによりて
なり先手筒頭戸田久助勝愛病免して寄合

とあり

二十八日月次の御礼例のことし稲葉丹後守正
諶ハしたし系親四人使番村瀬平四郎徒総小姓
組榊原左衛門磯序坂堀田付にさし遣物賜ハ
金五枚つゝ下さる又寺院住職あるハ別當職を
謝し東本を献するもの六人
二十九日安樂心院宮御中間まふされし例白須甲
斐守政雍して

両御所より干菓子をたまはる
八月朔日月なみの佳賀例のことし
二日三河國挙母城主内藤右近将監学文卒し
嗣子なきにより請ふまゝに同族能登守政陽に
二男菊千代政峻をして遺領二万石を譲らしむ
此学文ハ明和元年九月二十八日丹波守政苗
の嗣子となり実ハ紀伊中納言宗将卿第三子に
て初名を鉄之丞といふ明和二年六月一日初

見の礼をとり同三年十一月二十六日封をはよ
其年十二月十九日従五位下して山城守と称し
安永二年二月二十一日高嶽院殿の新廟法会に
より東叡山拝番命ぜらる同く四年二月二十
三日丹波守と改称し其年四月二十日日光山祭祀
奉行となり天明元年九月十九日右近将監と改
め同く六年九月二十三日
浚明院殿の新廟によりて東叡山の成役となる

寛政二年九月十日又日光山祭祀奉行命ぜらる
同四年十一月二十一日和田倉門の番衛となる
おなじく六月十日四十二歳にしてうせぬ
三日田村左京大夫村資媒たり和田新氏細川長門
守興虎森下野守快温たくひ集向公卿の餞付
をゆるさる寄合堀田鎮之丞一胡甚子孫弥一
善右西園郡代の寄合揖斐造酒助政恒逸見三
之助義方子源三郎義象二丸留守居芳升又六

祐貞か嫡子祐次郎祐隆ハしゝ父死して家つく
時十三人
五日濱田へあつさをらる奥右筆仲間并右筆の廣
表番の路となる
八日東叡山
浚明院殿霊廟に本多中務大輔忠籌代参れ
又同しくの凌雲院に於て高尚院方の田安中将治察の卿子
二十一回忌法会をとて其の霊牌所に例白須

甲斐守政雍代参して香資の銀十枚薦めら
る同しき日により三家使をもて法契忌を伺ふ
六の日新庄駿河守直規大番頭となり火消
役堀田主膳一宣小普請組支配となり先手弓
頭内藤伊織忠良持弓頭となり徒頭長谷川半
四郎佑正火災巡視の廣坂九兵衛忠寄共に先手
頭となり納戸頭野呂権太夫清茂 万年紀清長子織部 徒頭
となる寄合本多帯刀政房ハ同僚持様すへし

とおり又納戸は入るもの二人大番より一人小
普請より二人向井将監政香三浦の遠海船修造
検視として子左門正直与力志川しけに赴
むね心をつくしゝつ手主同心ホ船の業務精出
したるによりて其の子孫すへしと将監政香に伝
つらる又上村権十郎利香小笠原新九郎広穀
橋本吾平太敬賢大橋與惣名倉親英も同しく
賞をうけらる

九日三家のうるしへは使として雲雀五十つゝ
おくらせらる此の日使番して松平加賀守治脩
始めとして十四人へ同しく下さる
十日有馬中務大輔頼貴はしめ十人へ使番し
て雲雀三十つゝ下さる老臣にも又同し
十一日小納戸福村理大夫正尉子久米之助正衆
若年は伽に加へらる
十二日三縁山

惇信院殿霊廟に安藤對馬守信成代参れ
十三日
御成なし
姫の上様淑姫のかたへ二丸より遊ハされしとぞ
十五日月次の拝賀例のことし。書院番頭中坊
近江守廣看紀州より帰謁す。大久保山城守
忠寛はじめ参観するもの四人。本多伯耆守
正温始め新封の事へつかへまつるもの八人、使番覧

助名康為規駿府目付にさゝれ、いとまたまハる。縞
もの規を同し。内藤重一郎政峻、封を襲しを
謝し、金巻物太刀を献れ。有馬六左衛門久保太
田備中守資愛孫洋之助資貞、言戸田因幡守
忠寛二子嘉十郎忠齊、酒井雅楽頭忠道弟
直之助以翼、松平遠江守忠告四男勘解由忠
得、西尾隠岐守忠移二男重三郎某、久世隠岐守
廣敦弟雄之助廣愷、加納遠江守久周三男弁三

郎久敦同一四子留弥久恵田沼淡路守意明弟
鎌之丞意信近側白須甲斐守政雍子銭五郎政
徳書院番頭浅野[illegible]守長致子貞之丞長盈勝
田安藝守元忠子亀次郎元敦一橋卿家老飯田
能登守易信子榮之助易直町奉行池田筑後守
政倫養子修理長恵小普請組支配堀田主膳一
定子銭之丞一知火消役米津小大夫田羽子鍋
吉郎田張牧野半右衛門忠義子左京忠寛中根

内膳正寧子鍋太郎正英寄合石原正縄子源
之助正美小姓林筑前守忠勝子蔵五郎忠起森川
数馬俊輝子鉄三郎俊懌中奥小姓内藤加賀守忠
高子徳三郎忠英高木伊勢守守富子岩三郎守彰
滝川長門守利雍子鶴之丞美利酒井延江守
忠移子新次郎忠徹先手弓頭水野若狭守忠通子
熊三郎忠一牧野織部成知子延之丞成美目付成
瀬吉右衛門正定子小太郎使番多原権之助忠洪

養子設之並大宮覚助兵庫荒規貞子為十郎
小姓組与頭稲垣若九郎昭慶嫡孫千之助長祝
徒頭馬場大助子鋭太郎能勢甚四郎一英子助
之丞形匠丸毛助左衛門利隆子六郎利郎小納戸
岩本石見守正倫子鎮之丞正備奥詰内藤廣儔
子駒五郎廣道伊丹三郎右衛門直純子七之助
直榮矢橋熊之助良至子健之丞良昇平岡
外記道存子金三郎道同石丸帯刀之丞定国子権

三郎宮崎図書九郎一元子為三郎獨徳谷右
右衛門衛貞子鋭之丞衛足はしめて見へける
此のもとことは宮家の小人騎馬まてそろいの
他初兄のものも多し
十六日廣敷用人安藤長左衛門宮賀留守居番
とあり
十七日今朝紅葉山
院宮様本多弾正大弼忠寿代参寸奥右筆見

習間宮平次郎孝寛本職となる
二十日東叡山
心観院殿霊牌所に松平伊豆守信明代参す
二十一日寺家大沢右京大夫基之本職を命せ
らる
二十三日濱園にあそはせらる
二十四日東叡山
孝恭院殿霊廟に少老立花出雲守種周代参す

松平越後守康致病危篤なるにより奏者番脇坂
淡路守安董をして問はせらる
二十五日寄合医官竹田意安法印公豊編集の
書籍献りしにより時服を給ふ
二十六日小姓組新見又四郎正鄰三崩遜殿助正
餘書院番大田庄右衛門（乃ち政之助といへりたむ）資涼新番
伊東政十郎頤弘小普請大田善大夫好行復樂
主承（乃ち長三郎）貞長山名平八（乃ち縫五郎）豊孝曽我又兵衛

朝祐大久保甲五郎徳徊土岐遠三郎朝旨松平
内蔵助正名小納戸となり鵜殿将監井戸若狭守弘
佐子新十郎弘雄新に召出されて小納戸となり
廩米三百俵給ふ衣料も下さる表右筆伊庭達
之助奥右筆を見習ハしめらる
二十八日大番与頭竹尾源六郎成定納戸頭となり
寄合西郷孫九郎員逵花房外記正應火
災巡視を命せらる松平越後守康致卒せしかハ

その子仙千代康人のもとへ奏者番水野壱岐守
忠韶して香資の銀二十枚をおくらる
晦日源白殿（故尾張宰相治行卿なり）小祥の忌によりて側白
須甲斐守政雍して尾亜相宗睦卿及五郎太の
もとへ橋重
若君よりも干菓子を給ハさるによて亜相の方
よりの礼り五郎太の方よりハ使して謝しまゐら
すこの日猿楽方へ入もの納戸より一人納戸へ

入もの小普請より二人
九月朔日月次の佳賀例のごとし松平加賀守治脩
始め
若君へ見へ奉るものの若干ありよて三家の方と
似して
当日所司の出勤居伺ふ松平遠江守忠告参勤れ
土屋相模守英直就封のいとま給ふ板倉伊予守
勝意小笠原相模守長教内藤主殿頭政編井上

遠江守正広阪城加番よりて悩謁れ米津播磨
守通政近藤彦九郎用脩松平勘助信寅駿府加番
のいとま給ふ駿府町奉行松平（下）孫十郎保綱初て赴
任飛騨郡代飯塚常之丞政長もまた任所の赴
くよふ猶相ゆ規ゆ同し阪城戍役の大番頭菅沼
織部正定前松平伊賀守忠生同し與頭及番士よ
て悩謁れ又高家六角越前守広孝嫡孫主殿
広教寄合織田図書信節子熊三郎信由駒（駒）井半

花房讃岐守子栄之助親栄初見に品川東海寺輪
番代を謝し東木を献ス尾張五郎太のかた所
労まうり
両御所より御使岡部因幡守長貴して問せら
る此月十五日
若君山王へ御宮参あらせらるへく御ゆるしまし／＼て酒
諸始その他のことともへ老臣傳ふ
二日重陽の御祝として三家のかたかしこへ下しあ例の
ことくふ雨木新本使して
両御所へ時ふくを献れたまふ
若君にもはしめて謁見をし給ふまうのかり謝し奉る
またこの宮参の事により三家のかたかし始その
他のともかうふ光營して祝しまゐる尾張五郎太
の方所労よりて御例林紀伊守忠篤御使して
生干鮭を賜ふ八日又松平淡路守利興卒し
けれは其子出雲守利久に許す奏者番松平

能登守斎保して香資の銀三十枚又二十枚を
賜ふ
三日尾張五郎太のうし病危篤よりて亜相ヨ
京極備前守高久
若君よりハ御側衆本郷大和守泰行
甚の上より用人中山長門守信儀して御見舞
り寄合伊藤下総守正盛子総之助正数始め父死
して家法くるの九人この日品川弥右衛門まで火を羅
りしまて
四日尾張亜相のもとへ宿老本多弾正大弼忠
籌
若君よりは御側衆并隠岐守忠美
甚の上よりも用人中嶋三左衛門取敬して五
郎太の方逝去よりは御見舞として行へんまた同
しまによりてあふより音楽停廃三日又水戸
宰相治保の妹子二條右大臣治孝公の北の方

去し二十九日ハうせられしかハ水戸治保卿并ニ
少将治紀朝臣の旅ハ書院番頭浅野壱岐守長
致
若君の使をもつて申といひせらる日門使して書簡
を祝して
右の御方へもそのむねいひせらる
臺の上にも同し
五日尾張殿へ稲葉丹後守正諶の使して五郎太

の方うせられしよりて香資の銀三十枚
御臺所より中山長門守信勝使して銀五枚を
たまはる此日小普請より書院番に入る者十
十一人
六日小姓室賀甲斐守正較大岡主水正忠喜
新番頭に進む中山信濃守勝正水野伊勢
守勝昭小納戸細井彦左衛門要常前田要人武
宜本多八蔵永貞福村理大夫正慰坪内平太郎

宇治本園元右衛門道章園部庄九郎一元
谷在右衛門貞千本吉之丞居隆岡宮雄
之助信実設楽長三郎貞長松平内蔵助正
名等
若君に附さるゝ事
若君附小姓三枝丹後守某本郷の弟とて
下野国壬生城主鳥居丹波守忠意卒し嫡孫
恵三郎忠燾（テル）に遺跡三万石をたまはらしむ此の忠

意もとの丹波守忠瞭が子にして初名熊千代
といふ享保十八年七月二十八日
有徳院殿に初見し明の年十二月十八日従五位
下に叙し伊賀守と改む同二十年六月二十一日封を継
ぎ帝鑑間に候し元文三年四月日光祭祀の
奉行を勤め延享四年五月十五日奏者の役
を承り寛延四年六月二十八日
大御所（同年 有徳院殿）の御新葬により東叡山中

坐裏口警衛し寶暦二年四月二十六日寺社の
奉行をかぬ其年五月十五日
有徳院殿小祥の御忌法會のことをうけたまはりその
賞として六月二十六日時ふく五領たまはり同六年
七月十二日駿州久能山
の宮正遷宮によりかの山に赴く同じき年三
月二十三日若年寄に轉じその年十二月十
九日

大御所に附させらる寶暦十一年六月十二日
惇信院殿薨御ましましその年八月二十日辭職し
席のまゝに復さるあくる年五月二十四日奏者番
寺社の奉行をかねその日朝鮮人来聘の用
務をうけたまはる同じ年十二月十九日
若君にふされて西附少老に遷り安永八年二月二十
四日
若君孝恭院殿 はゝ年 薨させられしその年四月十六日と

まうのぼりし少老の末班に候すべしと命ぜられ
天明元年閏五月十一日少老の職となり同じく九月
十八日連判列
若君つかへ附ぜられ四品に叙し同じく二年三
月七日侍従に任ぜられ同六年閏十月若君本城に
召連られその年十二月御代替によりて御判物御
朱印御用ありて同じく七年四月二十九日
惇信院殿二十七回御忌法会の惣督を命ぜら

ませその賞として時ふく十端けり翌年三月七日
御判物御朱印の事務しよりてその恩賜として
て御手自御刀備前守行お銘し寛政元年二月二十
三日淑姫君御誕生御用ありしよりて時ふ
く七端ふその他の下されもの若干御幕の層
雲雀鵝び同じく三年十月十六日老年その上
眼病によりて上使並に火事羽共御西るしあり
同じく五年二月二十九日眼疾によりて御役御免御

手自御指の御刀備前国清光下し給ハり同し六年七
月十八日病危篤なるより上使をもて御懇の上
意を蒙り寿七十八ましくて終りをよくす
七日小姓組番頭前田安房守矩貫して水戸宰
相治保卿の喪居を問せたまひて氷糖一壺
をくらせらる小納戸書山播磨守長淑
若君へ附せらるゝこの日御側林肥後守忠篤し
て田安右衛門督の方を問せらる此ハ御後室女

松平義二郎姉死去たれハなり
八日東叡山
浚明院殿霊廟に御参りあり同し山の
厳有院殿霊廟にハ戸田采女正氏教代参す此
日御側白須甲斐守政雍して尾亜相の喪居
を問はせまして橋重をゝくらせらる
若君ハ
臺の上よりハ干菓を使ハしたまふ

九日菊節の佳賀例に同し小姓頭取助新見
大炊頭正編小姓を取ならしむ
十日東叡山
常憲院殿霊廟に本多弾正大弼忠籌代参
八月朔日家大澤下野守基季日光山
御宮代参使松平主水正亮ヶ祭祀の事行ふ
さらすき共に暁くつまりふ錦袍旧に同し丹後楳郡
頭速中少将にまてくむまいらひ御宮参詣し
まをのう郎に立寄らを

給ひしまよて事あり申し
家の例あれハ事あり　小納戸山下徳五郎道
孝安藤角蔵定規太田政之助資源山名熊五郎
孝孝土岐金三郎朝長とまよ小姓をなるこの日
大番柳世名本良友身の行ひを詠しつら小
普請に従さきまは事あそをそめしなる
十一日田安郎家老膳川相模守親文小姓組番
頭に准し西城に附さる田安郎用向も兼務へ
しよう事乃御徒至行小笠原久右衛門義武

御臺所用人となり書院番並方勤来つ内
道同しく与頭となる
十二日
禁裏附有田播磨守貞勝清五郎家司となる
又けさ三縁山
惇信院殿霊廟に安藤對馬守信成代参に
十三日尾亞相喪制あけてまうのほりたまひ弔慰
かつ下されものを謝せらる又老臣に觴し

退てゝ後小普請野田彦之丞成勝書物奉行
となる
十四日三縁山
文昭院殿霊廟に戸田采女正氏教代参し同し
山の
清揚院殿霊牌所に奏者番水野壱岐守忠韶
代参す先に筒頭佐野豊前守政親田安郎家
司命となる

十五日月次の拝賀行はる藤堂和泉守高嶷上杉
弾正大弼治廣来観に名居恵三郎忠嘉家継
しを謝しまつりて献りものは交代寄合松平主
水守惇子哲吉守職初見は浦賀奉行仙石
次左衛門政寅赴任の暇たまふ福相旧に同し
十六日勘定奉行佐橋長門守佳如は小納戸長井
又左衛門昌豊子は務免して寄合となる
十七日紅葉山

御宮及
諸霊廟に御詣行はる
十八日郭内あまねく巡見ましまして神田橋邸へ立
寄られ竹橋の花苑地にありし大筒上覧あり
尾張大納言宗睦卿の茶口切 橋姫 に拝観して
へ
若君にも同しく渡らせらる 葉紙に 杉花
十九日水戸宰相治保の少将治紀朝臣の亭年

解しまゐらするのおほせにて志川しに侍りぬ
きこえ上しを謝し奉る此日吹上花園へなりを
らせ玉ひ笠掛大的を観給ふ
二十日東叡山
大猷院殿霊廟に本多弾正大弼忠籌代参
日光山代参仕し祭祀を行ひ奉られし高家大
沢下野守基季 松平主殿正泰丹山より帰謁せら
れ

二十一日雑司ヶ谷の道にてなりしをさせらる水戸卿よ
り口切茶中川にて魚をつてまゐらせ給ふ
若葉つみ同し 茶銘横雲 大番松風縫之亟正懿身
の程ひとほしかれその上両番に似たかい
かゝぬきしまより小普請に入謁見をとと
めらる
二十二日目付間宮諸左衛門信好勘定奉行と
なり徒頭建部六右衛門広寛目付となり表右

番組頭佐野郷藏昌副西城裏門番の頭をかね
ぬ二の日松平加賀守治脩等に魚をそへて献
ず西瓜つゐ同し
二十三日小普請醫杉本君温良書病医にさ
らる
二十四日三縁山
台徳院殿靈廟に安藤對馬守信成代参し東
叡山

孝恭院殿靈廟に堀田攝津守正敦代参す此
日巳刻御表へ出まし布衣以下の諸役及番
士等武技御覧ありて剣鎗柔術をのし布帛二百を
給ふ
二十五日きのふのごとく御表へ出まし諸番士并に小普
請のともがらの武藝を觀給ふ禄ハきのふに
同し此日御側圖部出羽守長英御供し
御房より

其の上に御菜に椿重魚そへて参らせける
二十六日小納戸内藤源太郎組佳小姓となる井
伊掃部頭直中初めて出仕して明けの日
御宮参りより御迎としてまゐりの御ともつまを表
中より本丸に登営して老臣に謁し退く
二十七日辰の中刻
若君紅葉山
御宮に御参詣ありて太刀馬資金一枚並薦めありて還

御なりましまして又山王の祠に詣給ひ太刀金五枚
を薦し給ひ五十四人の小人騎馬を立て参詣の
つさ井伊掃部頭直中郎へ御立寄ありて
若君へ七五三の清饌を献ず掃部頭直中より真
太刀紀前国光広刀備前国長光並添ふ同国清
光巻物十色綸子十巻馬資金二枚嫡子鉄次郎
直亮より紀太刀若狭国家重の刀繪ふ二十把馬資
金一枚その他の親族より献りものも若干あり

又
若君より下させらるゝの家士等至る迄歩ゝかくれして
申の牌くへるを給ひ掃部頭直中まうのぼりは
立寄を謝して之へ参りける所ゟ熨斗鮑をた
まひ又掃部頭直中伏して
若君より三種二荷を献じおほ久の方へハ生魚
あり弟ふの供奉及先人郎の業ある家話元奏者番
本代以上君直の番士を席にして祝酒吸物

を給ふ三家并諸門族の業をのしまうのぼりは
事しま同ふ
若君
御宮参りの前後くもてしらへハ紅葉山
御宮ゟ安藤對馬守信成代参に
二十八日きのふ
御宮参の儀をすまして甚まりて尾州あるひ水世子
及松平加賀守治脩酒諸松平伊豫守重富の屋の

有りして諸鍋両回見えその他の少事まりの有り
老臣に譲り退く西城にも同し一万石より上の少事
候して椿代に着そへて敷ろ分
若君へ
臺の上より同し又尾紀郎より
御所へ二種千足
若君へ三種二千足
臺の上へ一種千足水郎紀の太きいより

御所へ一種千足
若君へ二種二千足
臺の上へ一種五百足水世子より
御所へ一種五百足
若君へ一種千足
臺の上へ二種千足俊祥院水戸宰相宗翰御簾中聖龍院尾張
宰相治紀御簾中より
御所

若君へ
姫の上へ一種つゝ松平加賀守治脩
御所へ一種五百疋
若君へ二種ゝ千疋日門より
両御所へ一種一荷つゝ安楽心院宮
西御所へ一種つゝ坊上寄方丈智量も同し丹後
掃部頭直中寺への御立寄を国にてまうの祈り
綿三千把太刀目録ささけ御座の間にして永国

の御刀并ニ御次にて祝酒賜ものを下されその
子欽次郎並亮もまうの祈り高木書院にして
豊後国真行の御刀を給ふ又ゐいさひの子を八
りし宿老太田備中守資愛対ふへ七出老臣
田検津守正教同しく四を給ひ院主紅葉山別
当戒善院山王別当観理院祝五樹下内膳銀五
十枚ゝくつまふ又日光門主ニ一種一荷銀二百
枚安楽心院宮百枚一種一荷恕中く百枚下されぬ

右佐ハ高家大沢右京大夫基之なり戸田采女正
氏教
若年より竜抱主太田備中守資愛
御府より同しく下さるゝ所ニ此佐勤しるよりてな
りその他る院役者よりも抽させけて祝しまゐる
もの多し
二十九日晩上此園にして新番大番のともがらの
的を観なふ賜禄例に同し勘定吟味役大久保
内膳君宮ハ納戸役を兼しめらる奥右筆倉林
五郎右衛門房博嘉右衛の継役となる又日門へ
本月の例祈祷の料を賜る高家戸田土佐守氏朋
して之をなさしむ
臨る三縁山
有章院殿霊廟に太田備中守資愛代参す此
日清五郎家司柘植長門守正寔久々の勤労
を慰せられて時ふくを給ふ

十月朔日月次の朝会例のことし井伊掃部頭直
中就封の暇給ひ鷹馬を下さる亀井隠岐守矩
賢参観に又使番内田常刀正典書院番倉
橋内匠久道坂城の目付まてゝ悩福に相良壱岐
守長寛子左京亮頼徳初見しまゐらす金地院五山出世
の公帖を給はり来つるの暇下さる銀五十枚時服
十領に先手筒頭長谷川平四郎佑正火賊捕盗
の事命せらる此日二丸にわたらせらる

二日
若君
御宮参せさせ給ひしによりて御祝として知恩院方
丈使僧して
両御所へ一束一巻つゝまゐらする
三日目付神保四郎左衛門長孝
禁裏附となる徒頭小笠原平右衛門常方さるし
月十九日富士のやまの望懸御覧ありけれは

出精あるを賞せられて時ふくを給ふ
四日山王の祠へ参詣ありし時太刀金一枚を薦めら
る観理院へ銀拾五樹下内膳へ同しく三給ふ
五日ハ誕辰の日なれハ群臣に饌酒を給ふ
六日下総国多古領主松平豊前守勝全病によ
り請ふまゝに致仕し子孫三郎勝升に遺領
一萬二千石をつかしむこの勝全ハ前豊前守勝縁
丹の第一子にして明和五年五月二十四日家継

その年六月朔日襲封を謝せし日初て
浚明院殿に見えまつりその冬十二月十八日従
五位下兼豊前守に任し安永九年二月六日
大坂加番命せられしその七月朔日阪城への暇
下されし時物あり寛政二年三月六日大手先
御門守護し同五年四月二十六日御免あり
のち致仕し寛政八年二月六日四十七歳にて
終りぬ此日先に前阿磯野内記政共子小姓組

久次郎政昌寄合宮城孫市郎和方養子ニ
政和中ハしめ父死して家たくもの十二人ヲ
平安藝守重晟茶口切ニ息そへて献茶留守
居岡野肥前守知暁目付妻木彦右衛門盛備
成衛去右衛門正寛西城目付小長谷縫殿高
政良横田十郎兵衛延松なとひ
差ス
西宮系の子孫なりしかよりきの日時ふくを

らふ其下吏へ白銀給ふ子差行り又奥右
筆秋山松之丞惟祺田中吉蔵正純書末君
左衛門太陽銀七枚つゝ賜ふ奥まて下されて同しう
まゝりてあり去りし十八日郭内あらされし
折にゐ射し番士ゆふく彼に此日小十人大森市
郎右衛門寛義遠島へ流さる
七日東ニ入大塚の道火災あり
八日東叡山

浚明院殿霊廟に松平伊豆守信明代参すこの
日寄合火災巡視をかねし戸田大学正役火消役と
なり寄合指揮せし伊沢内記方守先之を免ぜ
られ小姓組石河忠右衛門利運後役となり
書院番三宅助之丞政甫小十人頭となる大小普
請より納戸に入るもの一人この日午時より吹上
におはしまして笠掛的を観給ふ
九日亥日の嘉祝恒例の如し

十日留守居曽我伊賀守助道附ぶく五小普
請奉行石野筑前守範堯附ぶくこれに金三枚を
へ給ふこれは浚閣修復の事奉りしによりて
なりその他属吏金銀くだされし事あり
十一日巣鴨のほとり放鷹として出かけさせらる
此日大森鋭八郎某父科にて中追放させらる
十二日三縁山
惇信院殿霊廟に安藤対馬守信成代参し

十三日去りし歳のおり鷹射し當主に時服
給ふ先手弓頭長谷川平蔵宣以火附盗賊改を
らあふこの日美作国津山城主松平越後守康哉チカ
請置しまゝに子仙千代康人へ遺領五萬石給
はしむこの康哉

十四日三縁山
文照院殿霊廟に御参行るへきよしなりし雨に
て淹滞せらるれは太田備中守資愛代参す
十五日あらた御側のめし水野出羽守忠友
永井信濃守直温兼観に牧野備後守宣朱
継封のいはひに松平源三郎勝升賜りものして
封襲しを謝しまゐらす松平播磨守頼説子右近
初見しまゐり谷出羽守家董寄合小濱長五郎壽

隆駿府加番をつとむ此時松平出羽守治郷加番
佐渡守明陳松浦壱岐守清関東川々浚利助役
をつとめしにより出羽守治郷ハ時ふく二十佐渡
守明陳壱岐守清ハをのをの十領ふその家士にも時
ふく銀羽織をこうむる事見えたり西丸目付横田
十郎兵衛延松目付をかねり徒頭佐久間左京信近
西丸目付となる寄合久貝忠左衛門正貞火災
巡視戸川左門村真同列指揮すへしとなり高野
門女童寿保門右を謝しまつり一本一花をさし
く又表右筆より小十人組に転せらるゝものニ人
十六日朝とく一橋の閑地にあつまらせらるき放鷹を
ら家小姓組小笠原弥次郎持歌去りし八日吹
上にして弟子其の笠置を観みそひしは心に鷹
したねし雉出し放鷹打両られいそて時ふくを
うまふ
十七日紅葉山

御宮に安藝守をもて信成代参す
十八日肥前国小城領主鍋島加賀守直愈病に
犯さましかハ宗家松平肥前守治茂より請し
によりて隠退しその子鱗太郎直知に遺領七万
三千二百五十二石五斗を襲しむこの直愈ハと
その肥前守直員か二子にして初名を伊三郎と
いふ明和元年十二月十五日封を襲ぎ同し八年の
五月十五日

浚明院殿に謁をとりその年より敍爵し加賀守と
改め事ふ致仕して享和元年七月二十五日領主として
卒は寧四十六去りし十三日閑地へ徙されしに
その日鳥射し番士に時ふくこを賜ふ此日大番
大河内善左衛門改儀同し与力を召さるゝ
十九日駒場野に於てとらるゝを鷹もて鷲捕し給
ふ
二十日高家指揮ナし六角越前守廣孝か孫主

殿敎(院)大友式部大輔義珍嫡子左京大夫義方とも
に召出さるゝ同條を凡習ハし久く廩禄をのし五
る苞を下されて奏者番諏訪因幡守と粛して
伊達遠江守村候病危篤なりし時問をもてなす
二十日木下川の遊放鷹してたまふ重陽の祝に
附ふく献りし敷〻に内書を給ふ事例に同し
西城裏門番の頭役理郷茂昌副嫡子表右筆
又四郎召道父の蔭によりて番の士に入らる

二十三日代官鈴木新吾正豪勘定吟味役となる
る高家見習ふ六角主殿廣教大友左京大夫義方
なりに従五位下侍従に叙任し主殿廣教ハ伊豫
守左京大夫義方ハ因幡守と改らるも又さりし木
下川の放鷹の持多射し番士に附ふくをたま
ふ
二十四日東叡山
孝恭院殿霊廟に京極備前守高久代参し同

し山の
涼徳院殿霊廟に松平伊豆守信明代参し池上
本門寺
西善寺にハ西側岡部出羽守長堯代参し浅草
幡随院天徳寺へ増上寺伴頭覚天幡随院へ住
職とある
二十五日
勅使

院使到着ありけり戸田采女正氏教に高家大友
式部大輔義珍そひ
中宮使へハ松平伊豆守信明に高家中條山城守
信復添て慰労ありけり伊達遠江守村候卒せし
よしその子大膳大夫村寿のもとに奏者番
諏訪因幡守忠粛して香奠の銀三十枚あたへ
ありけり此日巳の牌より吹上の園にあつまりきこえ
て小普請のともがらの大的観給ひまいらす二丸

へわたらせらる
二十六日
若君さまの御側林肥後守忠篤酒井隠岐守
忠美木挽まいりつり御側岡部出羽守長老白
須田甲斐守政雍
若君様御なさる家
二十七日白木書院にいでまし公卿の引見あり
勅使勧修寺前大納言経逸卿千種前中納言有
政卿
院使梅小路前宰相定福卿
中宮入内によりて今出川大納言実種卿
女御使日野中納言資矩卿御對面ありて某
其の御祝として
御所より御太刀金三枚
院より御太刀金二枚
女院より金一枚

禁裡より
若君へ御太刀金三枚
院より御太刀金二枚
女院より一枚入内の御祝として
禁裏より
御所へ御太刀金三枚綿十疋
院より御太刀金一枚さあや五疋
女院より綿五疋

中宮より紅白紗綾十巻
禁裡より
若君へ御太刀金一枚綿五疋
院より御太刀金一枚
女院より綿五疋
中宮より紅白さあや五巻
立后御祝として
禁裡より

内府へ二種一荷
仙洞よりも同し
女院より一種一荷
中宮使より綿十疋一種一荷
禁裏
仙洞
女院より
若君へ一種一荷進らる

中宮より綿五疋一種一荷まいらせらるその他
宮門跡摂家の使者今出川日野両納言内継
統謝儀又公卿の自拝その家士司らつ樂代冠
帽末廣師より至るまてこと〳〵く奥へ入らるゝ
勅
院使の旅館へは高家前田信濃守長禄して接遇
に接そへて汎らはさ之き
中宮使のもとへは高家中條河内守信義して

同し所を清らハさるゝ
二十八日辰の中刻白木書院に出まして公卿
の辞見あり御洛暇給ふ
勅使
院使
中宮使へ
両所より綿賜ハりその他のものより贈物差
あり近衛殿よりの使へ

臺の上より銀五枚下さる淑姫の方よりハ三枚
ありまたし西書院番真野彦左衛門乱殺して
勸修寺千種桜小路の三卿へ時ふく安藤長左衛
門宮賞して今出川日野両卿へも同し
二十九日日光奉行八木但馬守補之病免にて小
普請酒井主水徳隣阪姓の弓奉行をもて先
手弓頭長谷川平蔵宣以多年火賊捕盗のことを
かうむりしにより時ふく綿ふ大目付安藤大和守

惟徳目付石川將監忠房成瀬吉右衛門正定使
番渡邊久藏孔杉木左京亮經明の夫小壹の
御鹿猪のこと等公家
晦日
勅
院
中宮之使のもとへ御使ありて明日申樂仰付ら
るゝによりまうのぼり心のまゝに見物の事仰

渡らハさる尾張高卿つも同しくこれを傳へらる
十一月朔御表へ出まして公卿饗應の申樂を見
そしめらるゝ樂始免の事ハ少老堀田攝津守正
敦して申樂大夫へ傳へらる常ふの散樂ハ翁三
番叟和布刈經政三輪葵上祝言なる八幡狂言
二番船渡し聟ト盗人なり樂の中ま大夫ま附
ふし纏頭を下さる要脚給ふ事例ま同し
二日浜の庭園にあそびをさせらる この日小十人五人

小普請一人表右筆となる
三日書院番組頭新見彦右衛門正輝子錠之助
正武西城裏門番の頭小栗又右衛門信秀養子書
院番又兵衛信陽始め父死して家たくもの七人
あさ公の府を殺して帰法れ此来子の牌は地
大に震す
四日本ふも公の發遠あり去して浜庭へおも
きられし持る射し番士時ふくみふこの日朝と

く吹上へおもてさらまて仙臺馬を献給くおふ
六日小納戸石本佐久左衛門勝皋西城よりうつ
る松平陸奥守宿村家人當馬買のことにより
時ふく銀給ふ
八日東叡山
浚明院殿靈廟に戸田采女正氏教代参れ
九日尾張亜相のもとへ安藤對馬守信明本多
弾正大弼忠籌してつかはさる　松平掃部頭勝長子

勇丸君子の手仰付られけるによりて亜相君より乃
弓を給ひ謝し奉りける紀水君にハ家士としてその手
傳へられける故吹上の園庭にて騎射御覧ありけり
十日志摩国鳥羽城主稲垣摂津守長以致仕
して嫡子和泉守長続に所領三万石を給ふ
しむ此長以ハ故和泉守昭央の子にして安永二
年七月廿二日家督し明和四年十月朔日初見し
その年十二月叙爵し和泉守と称しのち摂津

守に改めしが今隠退し文政六年五月十四日七十五
歳にして卒しぬ
十一日上千葉の辺に放鷹として成らせらる
十二日三縁山
惇信院殿霊廟に本多弾正大弼君代参す
十三日去る十一日御成の折鳥を射し諸番士
四人へ時服下されけり
十四日きのふ新にめし出されし両番大番小十人

組ニ入るものハ小姓組天野外記良陳其子權三郎
喜陳平井斧右衛門重武其子熊次郎豊昌兒
島孫七郎正域其子半三郎正孝書院〔番〕水野數
馬勝美孫斧太郎勝順親子ともに久々の勤労ニつ
藝技の精研なりし者也ニ小姓組宮崎次郎大夫
成章其子平四郎成美学問武技出精なりしゆへ
此たひ者ニ又小姓組淺野大学長貞子久次郎
長邦皆川仲右衛門政彬其子次郎八政武吉野

飛弾守高明其子惠吉正章河内吉右〔左〕衛門正龍
子斧太郎明求天野勘左衛門昌淳其子勘七
昌敦書院番永田善次郎清行其子保十郎清泰
荒井十右衛門保固子権次郎順固仙石寧右衛
門政房子長之助政峰武技精研なりし者ニ
又小姓組贄梅五郎正榮子孫市郎小出善右
衛門尹充孫三次郎尹信中山勘右衛門直供子亥
三郎直通安部四郎五郎信満其子右近信〔孫〕孫新家

与五左衛門廣孝子彦十郎孝則戸川権左衛門
安勝嫡子左吉安通柳沢源七郎安長子弥三
郎政任書院番最上源五左衛門義祐子五郎
作兵衛栄戸田庄右衛門忠圓嫡子鉄五郎忠喬
山川図書義武嫡子名庄義重弟居三右衛門
重陳子友五郎重美鈴木次郎右衛門廣政子銑尾
和政井戸十郎右衛門弘渡子重緒弘都中西右
緒子弥右衛門利重河野杉母道香子吉五郎荏範

弥右衛門辰直子又三郎辰武父の跡をもて両番の
内へをめし三る芭給ふ新番浅井金右衛門元方
嫡子繁之助元著軍学武技出精するにより大番へ
大番小笠原大々郎左衛門廣保子吉次郎廣晴石
丸七郎右衛門有名嫡子保三郎有保大塚三郎
左衛門時常子彦市時房土屋四郎右衛門虎勝
嫡子助次郎虎直西尾保右衛門正延嫡子藤五郎
正純武技出精するにより選て大番の内新番鈴木清

右衛門左光喜子乙三郎陸光細田三右衛門時
資養子要人時純三浦五郎三郎兼俊子半之
助義辰孫拘方端田孫作光学子孫次郎光風大
番孫目牧太性成子幸太郎性敬山田甚五郎正
留子民三郎正敦加藤八郎右衛門秋胤養子五郎
三郎正胤長井三郎兵衛利有養子丑之助利順
鈴木左内兼君子條左衛門兼猶後藤弥十郎正奎
子孫次郎正秀多田三八正峰子孫之助正道池谷

大番与内 [illegible]

木工之丞義徳子孫兵衛義功岩田半十郎正伸
子勘右衛門正貫大久保清右衛門忠寄養子内記
助忠房伴建彦左衛門政擧子初次郎政曲同し
く大番与内いつれも父の蔭をもって上武技よりを
のし二る儀下されず勘定組頭若林市左衛門義方
子縈太郎忠和武技出精小十人河原清次郎子
内蔵允父の蔭うつ武技 石原勝助義比子友四
郎義栄某右衛門忠顕子勘右衛門忠長同

田原三郎正廣養子新五左衛門正賢、牧野金助
正名養子源之助正路、杉本孫右衛門国利養子
孫十郎国寿、一橋殿右衛門政辨養子殿名勝政
成武技精研なるによりて小十人組に入、小十人より上
平殿義篤養子十次郎義体、杉野仲義同養
子嘉名勝直好、加殿鉄三郎正実子栄之助祿
方源之丞親紀子善殿、殿井逢平教升子吾
之丞延命田中台大夫貞尚養子鉄之丞貞孝

父の旗本よりこれも小十人組に入をのしる芭
小十人口を願ふ
十五日月次之朝会例に同し杉本筑前守高陸
大村信濃守名倉親八吉川和三郎泰通才徳川
勇丸の方之養子の事仰出されしにより尾亜
相へ
当御所より戸田采女正氏教を使として二種一荷
差遣より一種一荷勇丸へ遣物十三種二荷

若君より二種一荷聖徳院尼へ一種一荷

若君より一種ほかはさらに又

台の上よりも使して亜相勇丸聖徳院尼へ一

種一荷づゝ贈らる差あり同しくこれにより亜相より

のなかまゐる巻物二十馬代金を献し此対面行り

此日は亜相使して

若君へ巻物十太刀金馬代を献し勇丸のもとへ

よりも使し

若君へ巻物十太刀金馬代を献し勇丸のもとへ

よりも使し

此所へ巻物十三種二荷

若君へ巻物五二種一荷を献す又松平能登

守秀保子悦五郎秀友大田原飛騨守庸清

子惣之助光清初見して年寄その他祀官僧侶も

同し松平仙千代康人稲垣和泉守長続家

継しを謝し献りものあり

禁裡附神保四郎左衛門長孝初て赴任の時
へうかひ金時ふく羽織をきて下る家長崎奉行
高尾伊賀守信福参府ニ而諸府加番備前守大
番頭雲八ヶ回し信侶る院を謝し束本を献
するものあり又大番頭小笠原近江守貞温近
藤石見守用和書院番頭鈴木根大内記政永
勝田安藝守元亮小姓組番頭前田安房守矩
貴大久保忠美前守忠温百人組之頭渡邊半十

郎久津田山城守信久新番水野石見守勝政
松平小十郎定胤持弓頭建部大和守広般定
於国土正明光府三上因幡守季寛長坂
九右衛門忠暉徒頭小笠原平右衛門常方間宮友
三郎光懐小十人頭土屋源四郎正備東山牧右
衛門元宴明の寿鹿精の茶をのし組子を引率て
供奉すへしと命せらる
十六日松平土佐守豊雍ハしめ使者もて内府の

扈へまゐるもの三人小姓組田付又四郎景利后変
段翁をうつす

十七日紅葉山

御宮に戸田采女正氏教代参して先手頭太田
運八郎資同日光奉行となり中奥番松平伊
賀康英徒頭となる日光門主公遵法親王使
僧して
寺社奉行へ送り菓子切手より蜜柑そへまゐらせらる

大番小宮山七郎右衛門富茂嫡子八五郎佳重
武技精研によりて召出され大番に入二百俵たま
ふ又春将碁のものして其技の勝劣を視給
ふ

十八日濱園にならせたまふ

十九日松平左京大夫頼邁嫡子代参して廟の
扈へまゐるもの四人

二十日去し十八日濱苑の狩鳥射し番士に附

ふく給ふ此日吹上へならせたまひて南部馬
を御覧給ふ
あり
二十二日増上寺伴頭瀬岡深川霊巌寺住職と
若君附の小姓杉浦あた郎勝俊本城より侍り
小性丘野虎之助君篤
若君附となる　天ノ紀
二十三日使番にして西丸の広敷番之頭の松平
伊豫守治好まかりしぬ人
二十四日東叡山
孝恭院殿霊廟に堀田摂津守正穀代参れ
二十五日勘定山内守右衛門役方免し小普
請に入褒銀給ふ
二十七日亀有村の辺に放鷹したまふ有馬中務
大輔頼貴姫の使番して雁給ふもの七人
二十八日吹上にして騎射を御覧し給ふ南部

孝次郎信敬家士なる実のまゝなり時ふく銀を
稿ふ松平上総介舛役もしめ使番もて府下なる
まちの九人奥ましく右老へ出奉の賂一掴ほ手
下さる
二十九日きのふ騎射御覧ありしによりその師
徒頭小笠原平兵衛常方ま時服をあふひ其の弟子
すま金二枚信ゐ給ふ又去し二十七日流鏑の折
鳥射し中奥小姓水野石見守貞利もしめ新番
新番の士まをのし時ふくを給ふ
閏十一月朔日月次の佳賀行はる永井信濃守直
温能封の御使まふ旧来の者を祝して下りし二條
九條両家の使者人々まで涼川霊巌寺住職を
謝して一束一本を献ず又駿府城代小條安房守
氏興代賀手仙石次左衛門をいふ住所より
物贈り奥右筆大野園田市郎右衛門秀一本贈
ことある

二番演能にありき口番
三番使者として居下されしハ松平主殿頭忠馮
始矢十四人更ニて太田備中守資愛ハ巻の聯
を給ふ
四番出し二番の生の折る射し番士に時ふく
給ふ此番更ニて老臣は居をのし二を給ふ
五番小十人頭遠山織部景義息子極馬景濟
はし矢父死して家のくまの八人勤定奉行

宮号御事の行事勤定吟味役大久保内膳忠實
は武器修補のすり同りしよりり巻物を給ふ総左
衛門行事ハ目付の職たりし時を賞されその
他屋更御物ありり小姓組長田三右衛門元著その
与頭とある職役して居二門ハ垣田松摂津守正
明牧野備前守忠精まじはる
六番二番東叡山の寛永寺ありり松平出羽守
富室琉球中山王代替りよりあけのとしその使

大廷まいらする旨仰出されしに其方領分損亡并
に城下火災に罹り琉球国も近年窮困の趣
およて拝借を乞しにさまし〳〵の例にはあらざるなれ
ば格別の詮をもて米二万斛金弐万両恩借
せらる伊豫国宇和島城主伊達遠江守村候
卒をしより其子大膳大夫村壽に所領十五
万石を伝へしめらるかの村候は遠江守村年
が子にして初名を伊織といふ享保二十年の六

月七日父卒をしかは弔問の上使下され同し年
七月二十二日襲封しその八月十五日家督のよしを
謝し献りものは家例のよりて家士をもて人〳〵へ奉り
同し九月三日村隆と改名元文二年閏十一月十六日
上使をへてまかり始て本暦の厩下をきその冬
従四位下に叙し大膳大夫と称し延享二年六
月二十二日村候とあらためまた同し四年四月朔日明
の夏朝鮮人来朝によりて備後国鞆にて饗応なむ

さりぬその年六月二十四日母卒をしらへ奉書に
て遺跡を蒙り寛延二年二月三日遠江守政徳と
改め宝暦二年の二月七日政教と改その年十二
月十六日侍従に昇り同し三年正月勤る再材候
に改名同し四年七月十九日上使をもて始ては鷹
の雲雀をしたまはり同十年十二月八日近江国山
門西塔釈迦堂修理助役し同し十二年十二月
勤り助役前しまかり褒詞を蒙り時服二十重をたま

はり家士をつかはしまかりしものの行り同十年二月
十九日関東筋川渠浚利助役前をさりぬ同し四
月朔日同しくまかりしかは時ふく二十下さる家士に
まて褒物あり天明元年四月二十三日上使をもて
継封の時給りり同し六年の冬少将に任し同八
年十月二十七日参覲し寛政元年の三月二十
八日浅草米廩の火番前をさりぬその四月二十
四日増上寺火番をさりぬ同年六月十九日妻卒

七月廿三郎宅類焼より居向をもて其の年十二月十五日累年出精

をしかハ吊麿の上役を蒙り同し四年ノ勤向謹
慎政事向心掛厚候上聞に達し一段の事に思
召にて馬下されし同六年十月二十日病危篤により願
間の御役ありてその日七十歳にして終りし
なり
七日寄合堀田鎮弥一蕃貴方叔父 実ハ幸之助弟
一権家御続向をさる
八日東叡山
浚明院殿霊廟に安藤対馬守信成代参ありしの
日 明年二月
孝恭院殿十七回御忌御法会同し山にて御営
ありしによりその掛替を同所へうつして対馬守御
使にて参るを同しく日光門主御手をもて御
使ハ対馬守御使なり
九日使番にて松平兵部輔利考へ御盾を下さる
十日目付朝比奈次左衛門昌始御使番に行されなる

十二日三縁山
惇信院殿霊廟に太田備中守資愛代参す
十三日亀有村のあたりに放鷹したまふ寺社奉
行青山下野守忠裕明の二月東叡山にて
孝恭院殿十七回忌法会の事を行ふへしと
命ありし后居寿三郎忠寿ハおなし山の事を
仰付らる
十五日月次に朝会例のことし伊達大膳大夫村寿

襲封を謝し太刀金二枚綿二十把刀紀府国吉
馬をまいらす 松平又七郎信彰病免しまいらす日光をもうく太
田匡八郎資同病にて赴任の暇たまはり物八金五
枚時ふくに羽織そへ下さる 叙爵し志摩守と
あらたむ 使番覚助名康茂規発府目付まて
伺福川ホの日仙石伯耆守久隆して水戸少将治
紀朝臣に両拳の鷹を下さる 又使番して松平加
賀守治脩始めて四人へ両拳の鶴を下さる

十六日寒入なれハ猫族姉夫その他よりの寒
御起居を候し三家よりハ使して伺ふ去し十三日
御成のおり鳥射し番士二人附衆をたまふこの
日納戸番ニ入りの大番より一人小普請より一
人日門使して薯蕷まいらせきさきて寒候を問
ハさうなる水野出羽守忠成はし多人六人ハ扇を
のし二を賜ふ少老ニも同し
十七日紅葉山

御宮ニ太田備中守資愛代参ス寄合山村信濃
守良旺子小姓組十郎右衛門良紀堀長門直寛
子十次郎直雄石川山三郎（平）総祥が子兵庫総
用ハしめ父隠退して家つくもの十六人城上多
方丈ハ鉛童使僧して生花蜜柑をたてまつり宮
并を伺ふみ春右衛秋鹿市左衛門正信奥の儀
を見習ハしめらる
十八日濱園ニ遊ハせらる奈良公ハ饗應の事有

かゝりし勘定組頭へもしめ給物差あり伊達大膳
大夫村壽相馬因幡守祥胤へ使番して席を下
さるゝ又阿部豊後守正識へもかく同じく席を下さる
もの十一人此日小普請方内藤九十郎榮澄小
十人組頭さる
二十日去し十八日御成の折ふし射し賞士にあまね
く給ふ
二十一日雲松院の方有徳院殿御養女實紀伊大納言宗直卿女利根姫松平陸奥守宗村室五十回忌により奏者番有馬左兵衛
佐廣純して松平陸奥守宗村のもとへ香奠三十
枚を給ふ此日
基の上及淑姫君御表よりのそれぞれへ給ふ 一万年紀
二十二日水世子よりのありさまにて席下されし
を謝せらる又朽木近江守昌綱始多人席下さるゝ
もの九人
二十三日京家を問せられ其例本郷大和守泰行

して日門へ椿重安楽心院宮枝梗をつかはさる
増上寺方丈には使番花房勘右衛門正芳使し
て檜重を下さる
二十四日東叡山
孝恭院殿霊廟に井伊兵部少輔直朗代参す出御
猶雪降りけれは三家のかはりし使して物奉るを
所あしらき伺ふ高家諏訪・死奏者番まて申つかはす
御起居候しへつかはさる

二十六日松平内蔵頭治政身まかりしかは奏者番
松平能登守乗保して弔慰せらる
二十七日再雪ふりしかは三家使して物献
しまいらせ伺ふものの日紀伊殿より寒端の磨も
て招られし鶴を
南御殿にて献せらる
二十八日勘定組頭各務傳之丞元醒出脱を
科とおさる

二十九日貞恭院尼紀伊中納言治宝ノ北の方隆明院殿の養女實ハ田安中納言宗武ノの女種姫君なり小祥の忌日越法會行ハるゝにより本多弾正大弼忠籌を使として紀邸に香銀三十錠

臺の上より八十枚つかハさる

十二月朔日日蝕九分餘朔日例のことし小納戸頭取岩本石見守正倫ちなミに西丸目付

小長谷銀蔵某本城より使番渡邊久蔵

丸西城目付となる京町奉行菅沼下野守定喜赴任のいとま給ふ銀三十枚時服羽織をそへ下さる

二日濱庭に放鷹し給ふ この日小姓組番頭安藤伊与守直久して尾邸に鶴をつかハさる

三日寄合土屋主税頼香子縫之助頼門始め父死して家つくもの六人

四日去しとしのことく弓射し士に時服給

ふ
五日小杉川のほとりにおいてみつから鷹を放しめ
鶴を捉獲したまふ事あり宮よりも三家の方へ
使して此あいしき何ふ尾邸よりは志津幾壇年
一壷をさゝけらる
六日小納戸頭取に准しらるゝ三淵伯耆守広
本職をあらる一格見 又奥詰医官等ハ賞ひ玄心
寿奥医となさる

七日宝寿広賞行はる
八日東叡山
浚明院殿霊廟に杉半伊豆守信明代参す三縁
山にて八貞恭院尼法会結願にあり多致正
大猷君寿代参す 又三家の方へとうりハおなし
事によりて御起居候しらせらる
九日本丸に宝枝の広賞行はる日門尾水両公
水世子及ひ増上寺方丈智童に八代蜜柑を例の

ぬくをとりきさる
十一日具足の御祝として三家のうらし始め
例の家々より時ふくまいらさる　西城へも同
し尾張郎宅修理助ありて移徙より松平
伊豆守信明して甚物三十鮮鯛
若君よりも甚物二千鮮鯛を人をとりさる
よりてまいりのおり老臣に謝しかまれて退てさる
松平又七郎信彰に祐て使番片桐彰亟信濃して

雁を下さる
十二日三縁山
惇信院殿霊廟に安藤對馬守信成代参にこの日
小十人折并黒鍬比部囲正同し與所とある
十三日掃塵例に同し古猪所慶所所矢田堀
寺社奉時御二下さる鶴の庖丁都しまよりて
あり
十四日具足の褒賞あり　松平加賀守治脩に拝

母松平越前守重富妻うせしかハ奏者番諏
方因幡守忠粛して弔慰せらる松平伊豫守治
好ハ水野壱岐守忠韶して母うせしを問せ
らる禅宗寺紹俊甲斐庄武助正方常と精研
有けれハとて布衣の士に加へらる
十五日月次の朝参終のぬし土屋但馬守英直
始て条ハ親王人那須のもの二人条ハ福寸有馬
左兵衛佐譽純射の時給ふ安藤対馬守信成

侍従にすゝむ日光准后の山口丹波守直清来謁に
京本福寺前長老本谷日桂寺胡西堂出世公
帖ゑまわり高野行人方西方院年番代を謝
して来子東巻を献け遠州二諦坊も参謁して
東物を献るこの日追儺の式規のぬし
十六日立春松平出羽守治郷少将伊達大膳大夫
村壽松平安藝守重晟子右京大夫斉賢朝臣
侍従に進ミ松平播磨守頼説朝臣子右近四位に

敍し兵部大輔に任じ従五位下に叙するもの十
七人奥平九八郎昌高大給大吏内藤徳丸信敦
越前守多居壽三郎君壽丹波守内藤銈二郎
政峻山城守松平源三郎勝升中務少輔有馬六
左衛門久保備後守秋元但馬守永朝子捨三郎知
朝保加賀守松平丹波守光行子榮松光年河内
守書山大給亮章完子式部章孝大蔵少輔相
良壱岐守祥胤子左京樹胤志摩守大田原小飛騨守

膺清子庶之助光清山城守小姓組番頭菅沼大
膳定候保賀守松平大炊頭明信信濃守勘定奉行
間宮諸左衛門信好肥前守小姓山名玄蕃氏房
丹波守山木五郎左衛門正富若狭守能勢小太
郎頼徳因幡守森川数馬俊輝長門守と改む布
衣の侍に加へ叙するもの四十一人火消役戸田大学
正従先手弓頭彦坂九兵衛忠篤同し筒頭保科
内記方守西城目付筧傳五郎彦忠使番秋元隼

人保朝大久保矢九郎忠昇大澤主馬信容能勢市
十郎頼寛片桐新亟佐賢書院与頭藤方勘右衛門
忠道森彦長八郎総良小姓組与頭稲垣彦九郎昭
廣本目久之丞正房長田三右衛門元著徒頭石
河惣右衛門利匡杉浦傳纔康英小十人頭三宅助
之允政甫納戸頭梯屋源八郎成定纓拘寺行單
岩六郎左衛門親充勘定吟味役鈴木新吉正義奥
右筆組頭荻原金十郎友政小納戸本多千八郎

助阜牧野傳蔵成著荒尾平次郎成章松平九
郎右衛門忠盾石野三右衛門新見又四郎正都
三嶋縫殿助正繁伊東政十郎恒弘太田呂大夫
好長内藤徳太郎矩佳曽我又多衛朝恪大久保
甲五郎德好井戸新十郎弘隆西城小納戸千本吉
之丞居隆問宮雄之助信貞奈佐久左衛門勝皐
設樂長三郎貞長松平内藏助正名主殿頭の請
ハれしよし一橋郎用人金澤宮太郎安貞清

水郎用人水工左門罷郷松井庄左衛門ハ忠寿まいり
奥医官吉田快菴類峯竺承養玄山寿法眼画
工狩野常川惟信法印とある雲松院の弔法
會まそしらハ三家の方々使して内参して伺ふ
十七日 紅葉山
内宮霊廟に参拝ありて日門光山よりも家大夫
式部大輔義猗使して小袖綾衣枝柳を贈らる
ハさる家も又同じ方より菓菓を祝して

寺内所へ二種一荷を贈らせらる
十八日 濱園にまかりをらる
十九日 菓枝の儀行はる 土屋但馬守英直まかり
御寮の膳下さるるもの四人又使番して土佐山
城守彩布へ神て同じ品を贈らふ
二十日 日光門主登山ありしかれはれ御饗
面ありて例のまゝに饗膳をまふ
二十一日 亀有村の内より放鷹しとまふ尾

張大納言宗勝卿此年に重くわつらはれしかは朝
の恩賜禄の式東のみならてもありしかは中より
のおほせまて及はさる旨その家士めして傳へら
る書院番頭中坊近江守廣看して水軍および鶴
をつかはさる
二十三日臨時の朝會あり初見のものは寄合井
上内記正矩小姓組番頭前田安房守矩貴子又
吉矩方田安郎家老松平伊勢守近言子四郎近禮

小普請組支配酒井紀伊守忠穂養子重一郎忠
懿先手弓頭三上因幡守季寛子伊之吉季縣
奥田主馬忠寛子八郎忠武使番大久保八郎左
衛門忠務養子千吉溝口孫左衛門勝興養子要
之助勝雄若林十左衛門政恒子弓次郎政豊書院
番頭今福権右衛門勝知子伊織勝巳徒頭井上右左
衛門正盈養子寅三郎政春十人頭三宅助之允
政甫子吉次郎興行二丸留守居松村十右衛門良

尚甚子榮次郎始其の他のもの若干あり書院
番岡田与四郎善着身の紋ひよろしからねて
り上使番に處せらるゝことありて小普請入組を
とゞめらる此日奥より西城小姓杉浦長太郎孫
侍本城へうつり小姓永野虎之助君萬西城
へうつる
二十三日去し頃の黄昏射し當士に賜ふく
物ふ

二十四日東叡山
孝恭院殿霊廟に少老立花出雲守種周代参す
小姓組与頭旗奉行左門彰壽子孫ゝ遊救保はし
め父死して家つくもの二十人杉平上総介畜改
侍従に任し杉平下総守君和四郎に叙し紀伊郎
家司永野飛騨守君実子内匠助範明卿のためニハ
るゝによりて従五位下に叙十出雲守と改称す
家六角伊豫守廣殺大友因幡守義方廣米その

をの千俵をつかはす増上寺方丈并野老小石川
傳通院ハ蜜柑を献す星数を用ゐてありこの
日紀郎より使して拘合の籠を献る又越中国
通寺越生龍穏寺住職とある
二十五日溝口出雲守直候六郷佐渡守政武明の
奥参向公卿の餞使ゐをつかはさるこの日尾郎より使
して拘合をつかはし籠を献る
二十六日東叡山

至心院殿霊廟に白須甲斐守政雍代参す勘定組
頭格並御側衆名籠千秋父の蔭により有司をう
るへしといへとも累代近の勤務精熟なるに
より勘定組頭ともなさる郡代附の局に有へしと
ありこの日新番より仕るもの六人腰物方より
一人納戸より一人大番より二人小十人組より二人
二十七日前西城御側勤めし後菊の間縁頬詰
とせられし田沼能登守意致大番頭となる大

番竹内平右衛門信将小普請方山上熊太郎博
泉儒者岡田清助恕代者となり小普請方改役
杉浦助左衛門小普請方となる
二十八日前々の賀例に同じ三家を始め其他
のもの此慶事を祝し年賀す
若君御方へ三家および松平加賀守治脩其他
の者破魔弓を献ス今大路横山助次郎庸中務
大輔にあらためたまふこの日納戸番坪八三郎清影
城破損奉行となる
二十九日小姓組本多久右衛門利寛宗家小普
請本多新五右衛門義資の家を相続なさしむ

日本政府図書

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan